

夏休みの或る日

七〇

幼 児 の 母

やすり板がすりへつてゐるので、鐵筆が思ふ様に動かぬ。さうしても、今日中に、役員の前へ配らねばならぬ印刷物であるだけに、氣忙しくて餘計にうまくゆかぬ。立ち上つて、軒の岐阜提灯の中から蠟燭を取り出して、丹念に原紙の上に蠟をぬつて、一字の誤を調正して、ほつこした。みるまもなしに庭先をみるま、植木鉢の代用をしてゐる大きな古い七輪の朝顔は、四五本の蔓に、七つばかり花を付けてゐるそのそばに七輪に負けない、大きな植木鉢にも五六輪咲いてゐる。この花は、いづれも、昨年太郎が幼稚園でいたゞいて來た朝顔の種を取つておいて、今年、一粒萬倍の日に當る、五月の或る日に、種まきをしたものである。四五本の付にからんだ蔓は、元氣よく張り切つてゐる。こんな美事に、そして、澤山に増した朝顔を、子供に寫生をさせて、幼稚園の先生に、お目にかけたら、ぎんなによいだらうと思ひながら、見廻して居るま、今まで氣付かなかつたがやゝ離れて置いてある、小さい鉢の朝顔は、まだく

き思つてゐる中に、もう今にも、咲きさうな、蕾をつけて

ゐる事を、發見した。この鉢は、今年幼稚園から、頂戴して來た朝顔である。私は、この初咲きを亡犬の神前に供へたいと思つた。

「太郎さん、今朝、咲いた朝顔を、早くお父様に供へませう」ま、いつたら「いや」まいふ、すました聲がした。

ラジオ體操から、歸つた子供は、湯殿で、水鐵砲で遊んで居るまみえる。

「なぜ」ま問へば「お花を取るま、種が出来ないまお祖父様がおつしやつたよ。」

いやなら仕方がないま、強いても、すゝめなかつた。やつま原紙を書き終つて、梓にはめた。

ローラーに、墨を入れて、廻してみる。少し濃い様だ。揮發油を入れて、のばしてみた。

子供は、水鐵砲をやめて、昨日から泊りに來てゐる、いまこの弘子ちゃんま、裏庭に居る様子である。ブランコをこぐ音がする。三輪車で、かけ廻る音がする。さうかま思ふま、玩具のトラックをゴロゴロ、引きまはず音、つゞいて、

樂しさうな笑ひ聲。私は安心して、仕事をつゞけた。

汗が、ぼろり、印刷したばかりの藁半紙の上に落ちて、ぢわ／＼しみ込んで行つた。今日も、朝から暑い。陸軍病院の奉仕の時には、涼しい日だ。良いなあ。白い糸、針、それから、スリッパ、ふきんに、雑巾は、忘れない事。やはり、洗濯板と洗濯石鹼は、持つて行つた方がよいかしら等、ミ考へながらローラを廻してゐるミ、暫く、なりを靜めてゐるた子供達が、勢をもちかへして庭先へあらはれた。

運動服を着て、素足に下駄をひゝかけてゐる我子ミ、涼しい簡單服を着た弘子ちゃんミが、朝顔のむかうの、八つ手の木の後にある子供の背丈位の山椒の許にたつて、針の間にある山椒の實をミつて遊んでゐる。五六月頃の、あの可憐な趣のある木の芽の時代は通りすぎしてゐるからに、ぴん／＼ミこわい葉を、太郎はちぎり取つて、「弘子ちゃん、此の葉つば、何にするか知つてゐるの?」「知つてゐるわよ。お豆腐につけて喰べるのよ」ぢあ名前を知つてゐるか「木の芽さいふのでせう」では、この實は何にするか、知つてゐるか「知らない」ミ弘子ちゃんは、のびた返事をしながら、自分の指をなめてみて「太郎ちゃん、なめてごらんさい、辛いよ」あゝ。本當だ「ミ、二人は忽ち顔をしかめる。やがて、秋になれば、自然に落ちる運命を持つてゐる、山椒の實を、二人はしきりにつまんでゐる。

山椒は粒でもびりつゝ辛いぞ

これでも勇めば 山王の氏子だ

ミ弘子ちゃんが唄ひ出す

「あ、いけないんだ。いけないんだ。弘子ちゃんは、あら、あら、ミ太郎は、大聲をあげて、

「山椒を、摘みながら、歌をうたふミ、山椒が枯れてしまふのよ。ほら、もう、こゝから、枯れて来た。あら／＼、云つてやろ。弘子ちゃんは、あら／＼。」

ミ、いはれて、ばつが悪くなつた弘子ちゃんはポケットから、水寫眞を出して、

「太郎ちゃん。之れあげようか、かが、付くから考へよ。よが、つくから、よさう」ミいつて、一つ 巖下の男の子をからかふ様な口調で云ふミ太郎もだまつてはゐない。ポケットに手を突つこんで、小さくなつたろう石を出して、同じやうに、高くかゝげて、「弘子ちゃん之れあげようか、かが付くから……」ミ云ひかけるミ眞似つ子まんさい、豆屋の小僧豆を一粒拾つてくれい」ミ聲高く云ひながら無花果や八つ手や、芭蕉の繁つた木の葉のかげを抜けて小山へ走るミ、太郎も同じやうに後を追ふ。

「お山の大将已れ一人。後からくるものつき落せ」さいひ乍ら、後から来る者の爲に一步も譲らぬ様な形勢をみせる。「僕の家のお山ぢやないか」ミ、弘子ちゃんを、のかさう

「さ試みるけれきも、不成功に終つた太郎は何を思つたか、お饅頭は甘い」といふ。「甘いはお砂糖」とつけた、弘子ちやんはもうさつきの争は忘れたやうに、聲をそろへて、「お砂糖は高い、高いは十二階」と合唱になる。

「弘子ちやん、十二階は、この山よりきつ高いよ」「あたり前ぢやないか、私の家のお二階よりも高いのですもの」「十二階はこわい」と太郎が思ひ出した様に後を續ける。

「こわいはおばけ、おばけは消える」と二人で合せて居たが、いきなり、「おばけ」と弘子ちやんは、傍のアスバラカスの枝をもぎつて、稍々のびたおかつばの上のせて、顔を突き出すと、山からすべり落ちた。之をみた太郎は、得たりと「やあいさはやすき、膝の泥を落しながら、起き上つた弘子ちやんは、「叔母さん、太郎さんがいけないの」と大聲をあげて、うつつたへる。そして、「もう遊んであげない」と、行きがけの駄賃に、さつきのアスバラカスの枝を、太郎目がけて投げた。やはらかな夢のやうな葉をつけた枝があごを突き出して、にくまれ口をきいてゐる太郎の顔にいやさいふ程ぶつかつた。

「馬鹿」と怒氣をふくんだ眞剣な聲に一寸氣をのまれた弘子ちやんは、「馬鹿なら晩まで口あいてろ」といひながらさん／＼茶の間の方へ馳けてくる。太郎が後から「だつて弘子ちやんが、僕に木の枝をぶつてたんだもの」と半泣きにな

つて、狭い飛び石を我勝ちに馳けて来て朝顔の竹にぶつかつて、大切な花二つが、裂けてしまつた。わつさ泣き出した太郎は「弘子の馬鹿やろ。オタンチン」といふと、弘子ちやんは「自分がしたんぢやあないの」と口を返す。

いさ／＼同志で、さうしてかう仲が悪いのかと思つた。私と姉とは、小さい時から仲の良い姉妹で、けんかをした記憶はない。私は、いつも、一人子の太郎のこよなき友達として、仲よくしむけるし、姉も又、何を與へるにも一緒に、心をくばるのに。

「だつて」とお互に、自己の悪い點にふれられると、相手の悪をも、認識させずにはおかない二人の態度に、私はこれでよいものだらうか、考へさせられた。そして、子供の世界もなかなか複雑で、よいとか、わるいとか、一方に片づけてしまふ事が出来ないものだと思つた。

失敗もしくじりもない子はない。子供だから手の一つもあげるのも、やむを得ないかもしれない。だが、それをいはれたら、素直に、受取るこゝが望ましい。お互に、自分のした事を棚にあげて、少しもゆづる處がないのをみて、私は何さかして、もつさ広いやうな氣持を持たせたいものであるとつくづく思つた。一陣の風に、謄寫版にすつた紙がぱら／＼とこぼれた。まだ百五十枚程すらねばならぬ仕事が残つてゐる。暑いのは、氣候ばかりのせいではない。